

## 藤井懶齋年譜稿 (三)

—延宝五年から貞享四年まで

勝又基\*

延宝五年 (一六七七) 丁巳 六十一歳

○十一月六日、川井正直没、七十七歳。懶齋その行状を撰する。

### 【川井正直】

川井東村、字正直、称東村、慶長六年 (一六〇一) 十月十一日に正次 (のち確髮して道味と称す) の次男として大坂に生まれる。数年で伏見に移り、また数年して京都銅駝坊室町に移る。もと商家であったが、慶安年間ごろ、五十歳になんとして初めて儒学に志した。延宝五年 (一六七七) 十一月六日没、七十七歳。正直については、柴田稿 (二十七~三十一頁) が『先哲叢談後篇』巻二、『日本道学淵源録』巻一、『本朝孝子伝』を用いて詳述しているので贅言は避ける。

ただ本稿で付け加えておきたいのは、右の正直伝資料がすべて藤井懶齋による漢文伝記「川井正直行状」に基づいているという事である。藤井懶齋著「川井正直行状」は『事実文編』巻十九に収められている。年次は記されていないが、懶齋と正直の交流を考えれば、正直の没後まもなく書かれたものとして間違いないであろう。

延宝二年の項で見た雨森芳州『橘窓茶話』には、米川儀兵衛 (操軒)・中村迪斎 (楊斎)・藤井懶齋らが京都において儒書講釈を行っていたとあるが、ここに川井正直は含まれていない。懶齋「川井正直行状」には正直が講釈を行っていたとは記されておらず、代りに彼の学びと実践についての記述が目立つ。たとえば正直は晩学を悔い、「小学・四書・近思録等の書を同志に受読」し、自分にとって重要な箇所を抄出して一兩巻と成して毎朝大声で読んでいたという。晩学の儒者・正直は、三人とはやや立ち位置が異なっていたものであろう。

延宝六年 (一六七八) 戊午 六十二歳

○一月、懶齋著『蔵笥百首』刊。

### 【『蔵笥百首』】

大本三巻三冊。漢字平仮名交じり文。序あり (序題・序記なし)。全歌に挿絵を付す。

所見本は全て同板で、早印本の刊記は「延宝戊午年孟春吉旦村上勘兵衛彫刻」 (京都大学中央図書館本)、『国書総目録』は最も早い版本に「万治年間刊」としてお茶の水図書館本を挙げている。しかし該本は上巻と下巻途中までを合冊したもので刊記を欠く。年次推定は付箋に記さ

れた墨書と表紙に朱書された徳富蘇峰書付によるものと考えられるが、板面の痛みなどから見て後印本と推測される。『蔵笥百首』の刊年は延宝六年と考えておくべきであろう。

内容に関しては、二見田鶴子『「蔵笥百首」翻刻と紹介』（大倉山論集）四十四（平成十一年十二月 大倉精神文化研究所）が備わる。二見稿と重複する所もあるが、そのあらましを述べておこう。

無署名序（おそらくは自序）によれば、「周詩の章をたち義をとるのころにもとづきて、その歌の本説にかゝはらず、ひたすら婦道のうへにとりなし、ことばをいやすくして注しなさは、女子にたよりせむか、すなわち歌の本説にかかわらず、すべて婦人の道の事として読み、言葉を卑近にして注を施せば、女子のためになるだろうと考えたと言う。そして「百人一首を見侍て、歌のさまの此道に牽合しがたきをばのぞき、さらに八代集のうちよりくはえて数をもとのもうたとなし、をのれがころにまかせて訓誥す」、すなわち百人一首の適歌に八代集歌を加えて百首としたという。

たとえば「恋すてふわが名はまだきたちにけり人しれずこそおもひそめしか」という恋歌は次のように解説される。

まだきははやきなり。歌の心は、恋するといふ我名ははやくこそたちけれ。心におもひはじめしはたゞ我ひとりしりての事なりしが、といへり。たゞ我ひとりしりたる事のやがて世にひろまるは定たることはりなるに、ながくしられじとおもひけるにや、狐狸などいふ物だに人の心をよくしる事あり。まして天地神明の御まなこのいたらぬ所はなき故に、人何事にても、おもひよれば思ひよるよりはやく神明のしろしめして世にさとししらしめ給ふ程に、何ほど隠密の事にても、たれつぐるとなく人皆これをする。しかれば我心の内

といへど、神明の御目のまへなり。わが身を置ところはいかなる深きねや屏風几帳の内にも、みな神明の御まへなる事うたがひなし。こゝをわきまへざる人、ひとり心におもふ事、物かげにて身になすわざをば人しらずとのみおもふゆへに、此歌ぬしのやうにゆきあたるなり。よくくこゝろえらるべし。

歌意は言うまでもなく、いつのまにか漏れ伝わった忍ぶ恋を描いたものである。しかし解説ではこれを「何事にても」と一般化し、考えや人に見えない所での行動にも自律を求めている。

なお序では百人一首を主としているような書きぶりであったが、実際には第一歌から第十二歌までに留まっている。残り八十八首は八代集からの和歌である。

該書早印本を手にする限り、これが懶斎の著作だという情報はどこにも無く、匿名での刊行である。しかしこれが懶斎著である事は、万治三年（一六六〇）の条で記した通りである。その条でも述べた通り、該書の草稿は一人娘のために書かれたものであり、すでに久留米藩時代に成っていた。懶斎の旺盛な著書出版活動は還暦を過ぎての事であった訳だが、その始まりは、このように旧稿を板本として刊行する事だったのである。

# 【懶斎の著作目録】

東京大学付属図書館蔵『蔵笥百首』（享保六年大坂大野木市兵衛求板本。請求記号：E三一／一九八五）の裏見返に「藤井懶斎先生作目録」が存する。懶斎の著作目録として最も早いものである。挙げられた書名は、

本朝孝子伝六冊 大和為善録四冊  
 国朝諫諍録四冊 蔵笥百首六冊

二礼童覧二冊 徒然草摘義二冊

竹馬歌一冊 ときは木一冊

の八点であり、さらに、

右の諸作は藤井らんさい先生の作にしてみな世に行るゝ処也。いづれも人倫五常の道をととき、善をあげ、悪をこらし、まどひをあきらかにせしむるのおしへなれば、かならずよむべきの事なり。

との説明を付す。しかし挙げられた書名のうち、少なくとも『本朝孝子伝』は大野木市兵衛から出版された形跡を見ない。つまりこの目録は、大野木市兵衛の蔵版目録ではなく、藤井懶斎の著書でこの時点までに刊行されたものを網羅した目録であると考えるべきものである。

この著作目録は、懶斎が没後この時期に至って、教訓本作者のブランドとして認識された事の顕れと見て良いのではないかと思う。中野三敏「談義本——その精神と場」(『戯作研究』へ昭和五十六年二月 中央公論社)所載)は、享保〱宝暦期にかけて刊行された教訓本三十部余を列挙し、「実はこの時期が、かかる教訓本の最盛期」としている。そしてこれ以前には「元禄期には貝原もの、宝永、正徳期には井沢蟠竜子ものが纏めて出ているに過ぎない」としている。藤井懶斎の著作は多様であるが、教訓本の盛期たる享保期にいたって、益軒や蟠竜子のような先駆的な教訓本作者の一人として認められるに至ったのである。

□八月十九日、米川操軒没、五十二歳。

### 【米川操軒】

米川操軒、字幹叔。寛永四年(一六二七)生、延宝六年(一六七八)八月十九日没、五十二歳。懶斎より十歳年下にあたる。はじめ三宅寄斎

のもとで学び、何人かの師を求めたあと中村惕斎・藤井懶斎らと志を同じくした。

操軒については柴田稿十九〱二十四、三十八〱三十九頁に詳しいのでここでは贅言しない。先に見た『橘窓茶話』に記す通り、懶斎と共に京都市中で儒書講釈を行っていた数少ない仲間の一人である。その伝は中村惕斎が「操軒先生実記」を著している。懶斎はこの時期に川井正直・米川操軒という二人の盟友を相次いで失った事になる。

延宝八年(一六八〇) 庚申 六十四歳

□このころ武蔵国の節婦まつ没する。懶斎著『常盤木』の主人公。

### 【「常盤木」】

大本一卷二冊。漢字平仮名交じり文。所見本はすべて同板である。外題「常盤木」。内題・尾題なし。柱題「常盤木」。無署名序(序題・年記等なし)。

該書ははじめ無刊記で刊行されたらしい。実見した範囲では、土佐山内家宝物資料館所蔵本などが刷りの早いものである。後印本には京都尚古堂ほか一肆の刊記(年記なし)を持つ刈谷市立図書館本がある。

無刊記の早印本は、他の箇所にも刊行年次を示す情報が見あたらない。無署名序に「この常盤木のものがたりなん夫婦のをしへにとしるし置れたなれど、人につたふるまでもあらでゆかをかへたまへり。今にいまそかりせば猶このたぐひのことをあつめて前の二のふみにつぎ給ひなんを」とある所から、懶斎没後の刊行という事は明らかである。没後のい

つ刊行されたかは明らかではないが、同じ序に続けて「二人の子もまづ世をはやうして、そう（勝又注：家系の意か）さへ絶ぬれば」と、二人の子が没した事を記しているのは参考になる。次男理定の没年は未詳だが、長男革軒は宝永六年（一七〇九）に没しているので、少なくともこれ以後の刊行という事になる。そして享保六年（一七二一）刊の懶斎著作目録（延宝六年（一六七八）【懶斎の著作目録】の項参照）に『常盤木』の書名が載る所から、この年までには刊行されたのであろう。

さて該書は寛文から延宝のころ、武蔵国利根川のはとりに住んだ節婦・小沢（振仮名「こさは」）まつ of 伝記である。十七で野口氏に嫁いだまづは、悪しき病にかかった夫を手厚く世話し、十年以上を経て最期まで看取った。それを「ふるきけびるしなりける石谷入道」、すなわち元江戸町奉行・石谷貞清が江戸へ招き入れて表彰しようとしたが、貞清の死亡によって果たされなかったという。

「常盤木」という書名の由来は、文中に次のように記されている。

はげしきあらしにむせび、さむきつめ霜をかさねて、しほまぬ梢の千とせの色を、いとけなかりしよりこの人の名とせしも、かゝる貞節のほまれ世にあらはるべきさしにやなど、人のいふめれば、このふみにもあほうしさせて、常盤木とやよばまし。

つまり「松」という名と、その変わない貞節とをかけたの書名であった。なお『国書総目録』等では書名を「常磐木」と表記するが、右の引用箇所のほか、題簽も序文もすべて「常盤木」と表記されている。

先にも述べた通り該書は懶斎没後の刊行であるが、そうなる则该書が本当に藤井懶斎の手になるものであったかが問題となってくる。しかし先にも記した通り二人の息子の死についても記すなど、序者は懶斎の消息にある程度詳しかった事が想像される。その序に著者を「懶斎の藤井

先生」としており、これを否定するだけの積極的な理由を現時点で持たない。

なおこの小沢まつ of 逸話は他書にも載る。今のところ『つぼのいしぶみ』（元禄十一年刊）巻九、松崎蘭谷著『鑑袋』（宝暦十年跋、文化元年刊）の二書が確認できた。とくに前者『つぼのいしぶみ』は時代も重なるゆえ、やや詳しく見ておきたい。該書は漢字平仮名交じり文の女訓書である。この巻九「貞女列女判上」に載る一章は、目録を「むさしの国松と云女の事 付リ 右同断」とし、章題を「今乃世ときわぎ物がたり」とする。内容の情報量は『常盤木』とあまり変わらないが、字句は大きく異なっている。また末尾に「賛」「和歌」「評」「論」を付している。

ここで注目したいのは章題の下部に「ときわぎ物がたり」と題されていることである。懶斎著とされる『常盤木』と共通の書名が記されているのは、単なる偶然とは思いがたい。懶斎の草稿を『つぼのいしぶみ』が採って字句を改めたのであろうか。あるいは共通する出典があるのだろうか。

書肆は無刊記ゆえに確証はないが、大野木市兵衛であったか。そのかすかな根拠は、序文に「このごろなにはの何がし、此物がたりを板にえらせて世につたへんとて」と、大坂の書肆から刊行された事が記されている点である。懶斎著作目録が大坂の大野木市兵衛による物である事を考えると、両者を同一視したくなってくる。

○晩秋、中村惕斎と宇治の笠取山に登り、紅葉を見て詩を賦す。またこの頃までに北野へ移住する。

『中村惕斎全集』巻二「懶斎老丈の笠取山の紅葉を詠ずるの韻に和す」。笠取山は宇治北東部にある歌枕。『古今集』秋下「雨ふれど露ももらじをかさとの山はいかでもみちそめけん」(在原元方)で知られる通り紅葉が著名。また『中村惕斎全集』ではこの詩の三つ前に「懶斎先生を北野の隠宅に訪ねし日、その寄する所の雅韻をつぐ」が置かれている。

#### 【居所 〇二 北野】

ここで惕斎は懶斎を「北野の隠宅」に訪ねている。貞享二年四月の条でも貝原益軒は「往北野 且到懶斎」と記している。この頃までに懶斎は北野へ移住したらしい。

北野の具体的な番地は明らかでない。ただ、先に挙げた惕斎詩には「林垌隔断す北山の南」の一句がある。「林垌」は郊外の意。北山が『擁州府志』に「大北山、凡自鹿苑寺、至石影。惣謂大北山」とある大北山であるならば、北野天満宮よりはやや北西へ進んだ辺りであったか。

#### 天和元年(一六八二) 辛酉 六十四歳

△この年またはその翌年の初夏、中村惕斎と石山へ蛩を見に行く。

『惕斎先生文集』巻二に「懶斎老丈の石山観蛩の韻をつぐ」「懶斎老丈の石山に遊ぶの二律に和す」がある。詩の配列からすると天和元年(一六八二)と天和二年(一六八三)との間の出来事という事になる。石山は言うまでもなく近江国の歌枕で蛩の名所。『好色一代男』の世之介も蛩を見に訪れた。柴田稿(四十二頁)も記す通り、この時期、中村惕斎との旅行や詩文のやりとりが盛んであるようだ。川井正直、米川操軒と

いう朋友を相次いで亡くした時期とも重なり、行動を共にする事が多かったらしい。

#### 天和二年(一六八三) 壬戌 六十五歳

□九月十六日、山崎闇斎没、六十五歳。

承応元年【懶斎朋友と山崎闇斎との出会い】の項に見たとおり、承応元年(一六五二)頃に懶斎は山崎闇斎に学んでいたようである。しかしその後闇斎との交流は見取れない。中村惕斎らとともに別家をなしていたと考えておくべきであろう。

#### 貞享元年(一六八四) 甲子 六十八歳

○春分の日、『本朝孝子伝』に自序。

貞享二年の条参照。

#### 貞享二年(一六八五) 乙丑 六十九歳

○四月、京都滞在中の貝原益軒、懶斎を度々訪ねる。このころまでに北野へ転居。

貝原益軒『日記 五号』貞享二年四月の条に藤井懶斎との交流が記される。「十三日 往北野 且到懶斎」「十七日 懶斎・真祐来」「廿五日

往懶齋依預期也。饗食」。また五月には「二日 宇保氏饗。懶齋・□□幸菴・市村專安・小原新之介等座、晚如流來宿」「八日 饗懶齋・宇保氏・市村專安」。

四月十七日条に「真祐」とあるのは『非火葬論』の著者・安井真祐。

五月二日条に「宇保氏」とあるのは宇保淡庵。彼らについては柴田稿に詳しい(四十六頁、三十九頁)ので割愛する。同日に「小原新之介」とあるのは岡山藩儒・小原大丈軒である。彼についても柴田稿五十一頁に詳しく、妻鹿淳子「岡山藩政前期における「善人記」の編纂過程について」(岡山大学大学院文化科学研究科紀要「第十九号(平成十七年三月、のち『近世の家族と女性 善事褒賞の研究』(平成二十年四月 清文堂)に収録)も考証を行っている。彼には孝子伝『備陽善人記』があるため、筆者も「近世孝子説話の基底——『備陽善人記』をめぐる——」(『国文学 解釈と教材の研究』(平成十三年六月 学燈社)および「表彰の孝子伝、巷説の孝子伝——『備陽善人記』『続備陽善人記』の素材と編集意識——」(『明星大学青梅校日本文化学部共同研究論集第十集 言語と芸術』(平成十九年三月 明星大学日本文化学部)で触れている。他の人物については『中村惕斎全集』によってある程度補足が可能である。

五月二日に「幸庵」とあるのは京都の儒者・植木交庵であろう。卷之二に七言絶句「挽交庵老丈<sup>壬午</sup>」があり、元禄十五年(一七〇二)に没したと分かる。

市村(邨)専庵は『中村惕斎全集』卷二に「送市邨誠伯兄就官於備後集<sup>七</sup>」「誠伯兄赴西備臨別贈一章<sup>八</sup>」が見え、備後のいづれかの藩に仕えたいらしい。同卷之十「訓蒙短歌序」(元禄十二年七月)は専庵の著書に寄せたものである。『訓蒙短歌』については未詳。卷之十「市村元感

字説」は専庵の求めで誠伯と字した際の文である。ここでは「吾友洛人市邨氏子元感」と記している。卷十三「市村元感書云」「市村元感書」は長文の書簡である。内容は学問の事から門弟の評判までさまざま。市村の方に講席が完成した事を「他国ニ今迄ケ様之事被取立方、一所モ不承及候故、別而珍重存事候」と賛嘆しているのは興味深い。また専庵は『惕斎先生行状』(延享三年(一七四六)刊)に跋を付している。

## ○十月、懶齋著『本朝孝子伝』刊。

### 『本朝孝子伝』

大本三冊または七冊。表記漢文。刊記「貞享二乙丑歳十月吉日 西村孫右衛門板行」。自序「本朝孝子伝序」に「閏逢困敦春分之日伊蒿子膝臧序皆天和之第四祀也」、惕斎跋「本朝孝子伝後叙」に「歳在甲子仲夏之月／洛内仲欽書于伏江遯栖」とある。

該書の諸版については、拙稿「『本朝孝子伝』の流行」(金沢大学国語国文「二十三(平成十年二月 金沢大学国語国文学会)所収)に記した。該書の初版には何カ所か修訂が施され、また十ヶ月後の貞享三年八月には全丁を彫り直された改版本が刊行される。改版の際、今世部「中原休白」の章の「論」が大きく書き換えられている。

さて該書は日本の歴史上および当代の孝子七十一人を「天子」「公卿」「士庶」「婦女」「今世」の各部に分けて掲載し、それぞれに伝のほか賛・論を付したものである。該書については井上敏幸「近世的説話文学の誕生」(『説話文学の世界』(昭和六十二年十一月 世界思想社)所収)が多方面から考察を加えており大変参考になる。とくに近世初期から中国↓日本古典と対象を移して行った日本の孝子説話集が、『本朝孝子伝』

に至ってはじめて日本の当代へ本格的に取り組んだという史的な意義がある事、そしてそれは、懶斎の執拗なまでの事実へのこだわりによってはじめて為されたものだと言っている点は、該書の本質を言い当てている。

### 【懶斎著作と署名】

『本朝孝子伝』については別稿を用意するつもりでいるので、本稿では藤井懶斎の著作歴における『本朝孝子伝』の位置について考えておきたいと思う。延宝六年（一六七八）の項で見たとおり懶斎はこれに先立ち『蔵筍百首』を刊行しており、『本朝孝子伝』は彼の著書刊行第二弾という事になる。しかし『蔵筍百首』と『本朝孝子伝』とは大きな違いがある。それは『蔵筍百首』が無署名であったのに対し、『本朝孝子伝』には自身の署名がなされているという事である。

懶斎の著書でその生前に刊行されたものは全七部である。それらについて、表記と、著書中の署名の有無をまとめてみよう。

①『蔵筍百首』（延宝六年（一六七八）一月刊）漢字平仮名交じり文。署名なし。

②『本朝孝子伝』（貞享二年（一六八五）十月刊）漢文。自序に「伊蒿子膝臧」。

③『仮名本朝孝子伝』（貞享四年（一六八七）五月刊）漢字平仮名交じり文。署名なし。

④『徒然草摘議』（貞享五年（一六八八）月刊）漢字平仮名交じり文。署名なし。

⑤『国朝諫諍録』（元禄元年（一六八八）五月刊）漢文。自序に「伊蒿子膝臧季廉」

⑥『二礼童覧』（元禄元年（一六八八）十一月刊）漢字平仮名交じり

文。署名なし。

⑦『和漢為善録』（元禄二年（一六八九）九月刊）漢字平仮名交じり文。序に「よもぎが杣人」。

署名には「伊蒿子膝臧（季廉）」と「よもぎが杣人」の二種が見える。しかし「伊蒿子」が実名に近いものであるのに対し、「よもぎが杣人」は匿名に近い物であったと思われる。「伊蒿子」の名は、例えばさほど親密であったとも言えない室鳩巢の詩に「古風二首伊蒿子藤井徴君に呈す」（『鳩巢文集』巻之一）とあるように、広く知られていたものらしい。これに対し「よもぎが杣人」の名は他に見ることができない。第三者がこの「よもぎが杣人」という号から藤井懶斎を想定する事は難しかったのではないだろうか。

このようにしてみると、懶斎は生前刊行した著作の中で、漢文著作である『本朝孝子伝』と『国朝諫諍録』だけには署名を施し、他の仮名本は匿名で刊行したのだという事になる。この事は、懶斎の著作観を考える上で参考になろう。

もちろんこれら仮名本の中には、周辺の情報によってほぼ同時代において懶斎作と知りうるものもあった。例えば『元禄五年刊書籍目録』には「同摘義 藤井蘭斎作」「二礼童覧 藤井蘭斎作」「大和為善録 藤井蘭斎」とあって、懶斎のあずかり知らぬ所では隠したはずの著者が明らかにされていたのである。しかし少なくとも懶斎自身の意識を問題とする限り、これらの仮名本が匿名の形で出版されたのだという事をこそ重視すべきである。

また、同時代の知識人たちが同様の意識を共有していた事も確認しておきたい。元禄九年（一六九六）十月十五日室鳩巢宛遊佐木斎書翰には、又聞く、京師に藤井懶斎なるものありと。年七十有余。初名は真辺

忠庵。操軒・楊斎の友とする所なり。嘗て本朝孝子伝・諫諍録を記す。その志趣の善、文藻の美、また多く見えたり

とある。また元禄十五年（一七〇二）十月二十五日の項に見る宮川忍斎『槎行記』にも、

かれは若かりしより深く孔孟の道をしたひ、人にも忠孝をすゝめ侍るべき為に『諫諍録』『孝子伝』をあらはし侍りしに、其二編いつ比か異国へ渡り人の国にもてはやし侍るよし近頃つたへ承りぬとある。同時代の人々が懶斎の著作として挙げる書名は『本朝孝子伝』『国朝諫諍録』の二書であった。つまり、懶斎が自らの名を付して堂々と刊行した作品は、表向きにはあくまでも『本朝孝子伝』と『国朝諫諍録』の二書だったのである。そしてその認識は同時代の知識人にも共有されていたのである。

儒者でありながら仮名の教訓書を多く刊行した事は懶斎の大きな特色の一つである。しかしそれは懶斎の意識においては秘密裏に刊行した著作たちであり、同時代の人々もそれらが懶斎の著作だという事をさほど知らなかったのではないだろうか。その懶斎が仮名教訓本の著者として喧伝されるようになるのは、延宝六年（一六七八）【懶斎の著作目録】の項で見たように、享保六年（一七二一）、『蔵笥百首』の巻末に懶斎著作目録が広告として貼り付けられるようになる頃まで待たねばならない。つまり教訓書作者懶斎という認識は、懶斎が没して十年以上経ってからのものであったのである。

#### 【書肆・西村孫右衛門】

該書の書肆は刊行第一作『蔵笥百首』とは異なり、京都の西村孫右衛門である。前項で懶斎の生前に刊行された著書は七部であった事を述べた。このうち『本朝孝子伝』『仮名本朝孝子伝』『二礼童覧』『大和為善

録』の四部が西村孫右衛門から刊行されている。内容・書型もまちまちであるが、『本朝孝子伝』以外の三部が仮名本である所に一つの特徴を見いだせようか。

この西村孫右衛門から刊行された他著者の書籍については拙稿『本朝孝子伝』の流行」（金沢大学国語国文）第二十三号 平成十年二月 金沢大学国語国文学会）でも少し触れたが、松井精『野語述説』（貞享元年（一六八四）刊）、『神祇服紀令』（貞享三年（一六八六）五月刊）、『福田殖種纂要』（不可亭編 貞享三年刊）、『父母恩重經図極鈔』（貞享三年五月刊）、『蠡斯草』（元禄三年（一六九〇）五月刊。懶斎序）を見る事ができた。いずれも教訓的な書物であるが、思想的には偏っていない。

#### 貞享三年（一六八六）丙寅 七十歳

○元旦、詩を作り、中村楊斎に見せる。

『楊斎先生文集』巻二に、「伊高老丈見示元旦書懷篇漫次高韻因奉祝誕伏斧正 丙寅正月」あり。そのほか『楊斎先生文集』には懶斎との贈答詩文を多く見出しうるが、残念ながらその殆どに年記を欠く。

#### ○八月、懶斎著『本朝孝子伝』改版本刊行。

この間における異同については、すでに拙稿『本朝孝子伝』の流行」（金沢大学国語国文）二十三（平成十年二月 金沢大学国語国文学会）に記したので参照されたい。初版の版木が失われた理由は明らかではな



いが、そのあと早急にこの改版本が刊行された所に、該書の流行を見て取るべきであろう。

○九月、筑後の孝子市右衛門に関する伝記を著す。

『筑後志』所載。筑後地方の孝子、市右衛門についての漢文伝記である。「貞享丙寅季秋穀旦 洛西散人懶斎藤藏謹記」とある。該書については拙稿「藤井懶斎と筑後の孝子」(『書籍文化史』四 平成十五年一月鈴木俊幸)で述べたので略述に留めるが、要するにこの文章は『本朝孝子伝』刊行後、懶斎が数十年過ぎた筑後の孝子を取り漏らしていた事を指摘され、慌てて書いた作文である。この文章は漢字平仮名交じり文に書き換えられて、『仮名本朝孝子伝』(貞享四(一六八七)年五月刊)に「志村孝子」として追加掲載される事になる。『本朝孝子伝』の反響の一こまを窺いうる事例である。

△この頃、武富廉斎、京都の藤井懶斎を訪れる。

武富廉斎著『月下記』五に「懶斎年七十なりしが……」とある所からここに置いた。寛文十二年【武富廉斎との交流】の項参照。

貞享四年(一六八七)丁卯 七十一歳

○四月庚辰、次男理定と共に太白を見て、その理を調べさせる。

『睡余録』三九八による。

○五月、『仮名本朝孝子伝』刊。

【『仮名本朝孝子伝』

大本七巻七冊。刊記「貞享四年五月吉祥日／西村孫右衛門藏板」。序は「仮名本朝孝子伝序」として末尾に「歳ひのえとらにやどるその月その日その野に年ふるおきな筆を浅茅が露にすゝぎ侍る」とある。他に「書題」(署名なし)を冠する。所見本は全て同板である。

該書は前年刊行された『本朝孝子伝』を漢字平仮名交じり文に改めたものである。先に触れた「書題」のほか『本朝孝子伝』から少なからず異同があり、その詳細は拙稿「『仮名本朝孝子伝』の一側面」(『雅俗』第八号(平成十三年一月))に述べた。要するに漢文版『本朝孝子伝』の簡略版である一方、漢文版『本朝孝子伝』刊行時に寄せられた感想や疑問・意見に応える意図も込められている。

そこでも述べたが、儒者が漢文で書いた書物を自分の手で平仮名化して刊行した事例は、この時期までにおいては珍しい事例であろう。

○八月、『国朝諫諍録』に序を記す。

次年の該当項参照。

□九月、次男藤井理定、『国朝諫諍録』に跋を寄せる。

次年の該当項参照。

○十一月、中村惕斎著『比売鑑』に序を寄せる。

「比売鑑序」として、序記「貞享丁卯冬十一月 伊萬子膝臧書」。序で懶斎はこの『比売鑑』が女性のみならず、男性にも益するところ少ないとしている。なお拙稿『『比売鑑』の写本と刊本』（『近世文芸』第七十号（平成十一年六月 日本近世文学会））にも述べたが、『比売鑑』は増補を続けた写本である。その増補過程で、『仮名本朝孝子伝』の章段のいくつかは『比売鑑』に採録されている。

惕斎は『比売鑑』を写本のまま増補しつづけていたのであり、刊行を意図してはいなかった。現行の刊本（紀行篇宝永六年（一七〇九）正月、述言篇正徳二年（一七一二）正月刊）は、著者没後、無許可で刊行されたものと考えて良い。よって懶斎が『比売鑑』に与えた序も、『比売鑑』刊行時に付されたものではない。写本『比売鑑』の継続的な増補の一段階で付されたものと考えておくべきであろう。

（未完）

\*この論文は、科学研究費補助金（若手研究（B））『『本朝孝子伝』研究——「孝」から見た近世前期文学の再検討』課題番号二〇七二〇〇六三 研究代表者・勝又基）の助成を受けたものである。